

# なのはな通信

第14号 2005.7

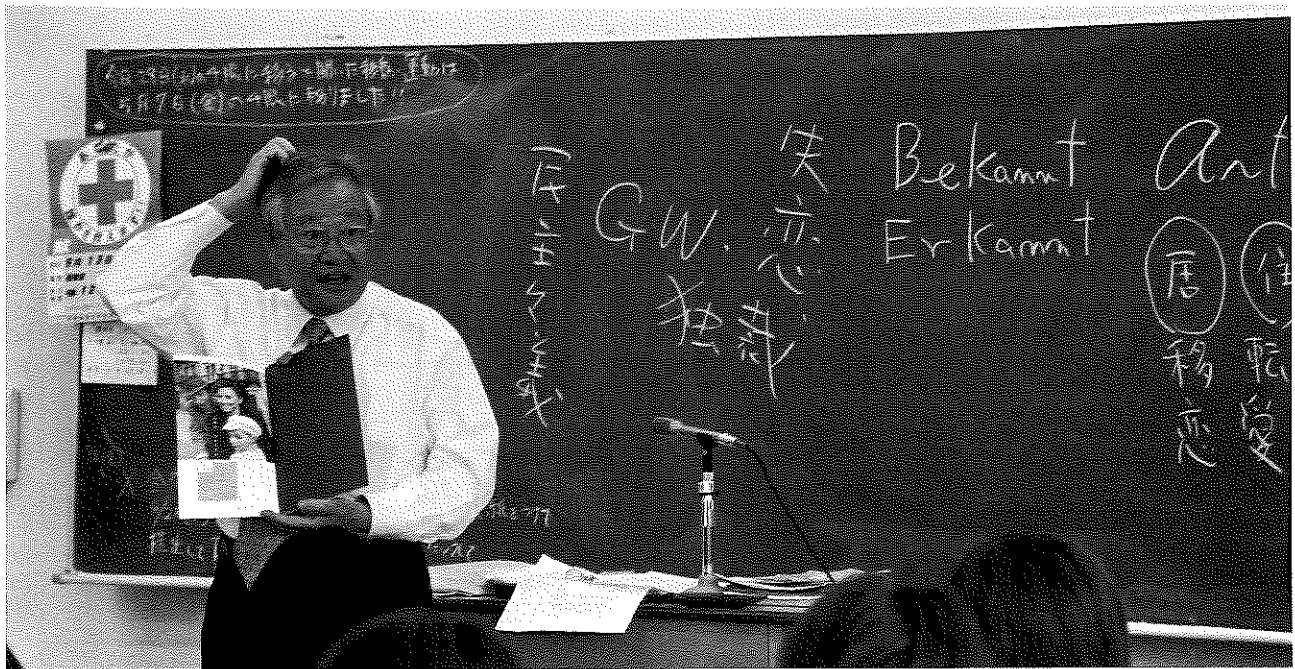


編集・発行  
勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 石倉 啓子



三上校長の授業風景。キーワードは「失恋」？

## 戦後六〇年に想う

校長 三上 満

二科二年のある日の授業中のことである。医療・平和・社会保障など、社会の出来事について感想発表を行ったあとの質問タイムでYさんが次のような質問をされた。

「日本に対して、侵略戦争についてちゃんと反省していないというアジアからの批判はあるが、日本と同盟してたたかったドイツに対して、批判が起きていない。どうしてなのでしょう。」

私は「ドイツは戦後、ナチスドイツの犯した罪をしつかり反省し、謝罪し、最大限の補償もし、ナチスの再来は許さないという誓いをくり返し行ってきた。それがドイツの信頼をゆるぎないものにしていく」と答えた。

ある調査では、「ドイツを信頼できる」と答えた人は、フランスでは八十五%に達している。ナチスドイツから莫大な犠牲を強いられたフランス人からも圧倒的な信頼を得るほど、その反省は徹底している。

ところで日本はどうであろうか。中国や韓国からくり返し日本に対する「歴史認識」についての批判が出されている。「日本が行ったのは国際法にのっとった戦争であって、犯罪ではない。戦争犯罪人として裁いた東京裁判はまちがっている」「日本のやったこととナチスのやったことは程度が違う」などという、政治家・閣僚の声が相ついでいる。おまけに首相の靖国神社参拝である。これは「あの戦争はまちがっていなかった」と言っているにひとしい。中国や韓国はじめマレーシアなど日本の侵略を受けた国の、日本に対する見方が厳しくなるのも当然と言わなければならない。

今年には戦後六〇年、私はあらためて、戦後四〇年の終戦記念日にドイツのヴァイツゼッカー大統領の語った言葉を思い出す。

「過去に目をつぶるものは、結局のところ現在をも見誤るものだ。」この言葉を、明日を担う日本の青年たちに送りたいと思う。

# 2005年度教育活動

主な学校行事、教育活動は次のとおりです。

## 2005年度教育活動（4月～7月）

	学校行事	1科1年	1科2年	1科3年	2科1年	2科2年
4月	7日 始業 9日 第11回入学式 1科41名 2科41名	22～23日 合宿研修		25日～28日 研修旅行	21～22日 合宿研修 「生命活動」の学び 28日 田植え	25日～7/22日 各論前期実習
5月		19日 療養環境実習	9日～27日 成人Ⅰ実習	6日 栗生染泉園見学 20日 研修学びの発表 30日～ 成人Ⅲ実習		
6月	3日 第11回体育祭 28日 第1回運営委員会		14、15日 成人Ⅰゼミ 20日～7月7日 成人Ⅱ実習	17日 成人Ⅲ実習	21、22日 生活・労働フィールド 24日 生活・労働フィールド 発表	
7月	25日～8/28日 夏期休暇 28日～29日 臨床指導者研修会	1日、6～8日 基礎Ⅰ実習 19日 基礎Ⅰ実習 発表	20、21日 成人Ⅱ実習 ゼミナール	11～14日 成人Ⅲゼミ 19～21日 保育所実習  国試補講		   国試補講

## 今後の予定（8月～3月）

	学校行事	1科1年	1科2年	1科3年	2科1年	2科2年
8月	27日 ときめき学校探検 29日 始業 平和学習会		8/30～10/14日 老年・在宅実習		30日「関さん」の森	
9月	9日 総合防災訓練 16日 第8回 自治会総会			9月5日～12月2日 専門領域実習	2日 生命活動発表 12～10/5日 在宅フィールド	5日～29日 各論後期実習
10月	1日～2日 東葛祭 秋の学生健診 25日 第2回運営委員会	24～11/2日 基礎Ⅱ実習	20、21日 老年・在宅 ゼミナール		24日 研修旅行発表	11～14日 研修旅行 24日 研修旅行発表
11月	16日 両科推薦入試 24日 県下看護学生 研究発表会 26日 第11回 キャビンガレモニー	合宿研修 26日 キャビンガレモニー	8、9日 社会保障 ゼミナール 21日～24日 地域フィールド	24日 千葉県下 研究発表会	10日 在宅フィールド 発表会 17～12/2日 基礎実習	1～12/15日 総合実習 24日 千葉県下 研究発表会
12月	国試願書提出 17日 ときめき学校探検 26～1/9日 冬期休暇			20～21日 総合実習 発表会		14～15日 総合実習 発表会 19～20日 総合試験
1月	10日 始業 27、28日 1科入学試験	基礎Ⅲ実習	12日 地域フィールド 発表会	国試補講		国試補講
2月	3、4日 2科入学試験 第95回 看護師国家試験 22日 1科Ⅱ期入学試験		生命活動	看護師 国家試験	基礎実習 ゼミナール	看護師 国家試験
3月	7日 第3回運営委員会 11日 第10回卒業式 28日 国試合格発表 17日～春期休暇	10日 学年末試験 14～15日 技術ゼミ	7、8日 生命活動発表会 10日 学年末試験 14～15日 技術ゼミ			

# 進化し続ける 久保知代恵先生

## モットーは「日々あらたに」

### インタビュー 机 みどり



三月に副校長を退任し、活動の場を地域へと広げた久保千代恵先生にお話を伺いました。

在任時より言葉の重要性について話してきました。「考える」こと、言葉の本質とは何かを大事にしている。そして言葉を正確に使いたいと思う。そのために日常生活を大切にし、流されないために新聞や本のキーワードを書き留めている」。

先生の持つ人間観は「終戦直前未熟児として生まれ、中学まで虚弱児だった。そのため常に家族やクラスメイト・周囲に支えられて育った。周りに支えられないと生きてこれなかった。特に母からは生命を大切にすることと周囲と仲良くすること、貧乏ではあったが芝居や映画等に連れて行ってもらい文化を楽しむことを教えてもらった」お母さんが土台です。

そんな虚弱児だった先生の転機は「教室の隅っこで一人本を読んでいる少女だったが何を思ったか中学二年の時、クラスメイトに助けってもらいながら北アルプスに登った。夜空の星が美しく、登山の魅力にはまった。初めてのビックバンだった(笑)」。

「高校入学は六十年安保の頃で民主的な先生達に囲まれ、論理が通れば学

生であっても認められた。信州・穂高で仲間と毎週登山に行き、川の汚染調査や自由民権運動の遺跡を巡った。そしてエッセイや詩が得意な仲間と機関紙を発行するなど楽しんだ。

教員からの押し付けによる学びではなく、自ら『なぜ』と考え知ることには面白いと思った。東葛看護学校の『フィールドからの学び』や『事実からの出発』は、この時から来ているのかも(笑)。だから自分が看護学校に進学した時は、すべておしきせでつまらなかつた。ただ先生は患者さんに会える実習が好きで「学生になぜそうなのか、と厳しい質問ばかりする婦長がいた。答える為にとことん調べた。実習終了時その婦長から『明日、小手術があると言われたら、私はその手術について復習します。経験の上にあぐらをかかないこと』と言われた。調べる面白さ、手応えをその時つかんだ」。

先生が日頃から話す保健思想拡大の考えは「看護師になり楽しくなってきた時、母が進行末期癌で亡くなり、母を守れなかつたという思いから立ち直れないほど大きなショックを受けた。その時先輩や仲間から『お母さんのような人をなくす道を考えて』と言われ、

考え抜いた。そして『無知・貧困・病氣』がそこには一つのものとしてあると気づいた。たとえ字が読めなくても誰にでも分かる説明をすることや、病気をなくすためには予防医療が重要で、それには保健思想を拡げる事が必要だということ、貧困をなくすには社会保障の充実が必要だと思った。国民自身が国の主人公であると気づくことが大切だと思った。」というところがらきています。

今の青年たちについては「選別・評価のための教育を受け、学校が楽しくないと聞くと胸が痛む。自分を守ってくれる人がいないこどもの苦しみは計り知れない。ただ未来を封鎖されている中でも一人ひとり輝きたいと思っている。青年たちの夢や希望を取り戻させてあげるような、存在になりたいと思う」

最近、近所の方から医療相談を受けることもあるそうで先生はそれが誇りと話す。「定年を迎え、国民の健康を守る労働者・看護師ではなくなっても、獲得した知識で皆をハッピーにできると思う。年内に自宅マンシヨンの集会所でまず健康学習会を一回開くことが今の目標」とのこと。やっぱり久保先生は日々進化し続けている。

～まだそれは  
始まったばかり  
だけれど～

二〇〇五年四月九日、『看護師になりたい』という共通の目標を持ち、受験の難関を突破した四十名が看護第1科第一期生として入学、彼らの新生活がスタートした。入学して一週間足らずだったがそれぞれ役割を持っていくこう！と合宿を待たずにほとんどが立候補で組閣が決まった。入学してちょうど二週間たった頃、『水海道あすなるの里』で共に三年間学んでいく仲間を知ろう！と交流合宿を行った。実行委員会を中心に食事係・スポレク係・保健厚生係と四十人一人一人が役割を担い準備をすすめた。グループ討論のテーマ「私はなぜ看護師を目指すのか？」については幼い頃からの憧れ、いじめ・身内の病気や死に直面し悩み苦しんだこと、人のために役に立ちたい、守って行かなくてはならない者の存在など言葉に詰まりながらも赤裸々に語り合うことができた。今までは第一印象で「怖い」と決めつけ距離を置いていたり、話したことのない人もいたが三年間共に学んでいくクラスメートのことが知れて良かった！みんな頑張っている！と確認することができ、『涙の数だけ優しくなれるナース満になるう！』というス

ローガンを掲げた。

初めて本格的なグループワークに取り組んだ車椅子ウォッチング。五人ずつ八つのコースに分かれて病院バス、豆バスやJR、流山電鉄、京成バス等の公共交通機関を使って流山・松戸・野田・柏地域を探索！文化会館や図書館・市役所などの公共施設をはじめ普段私達がよく利用しているファミレスやコンビニなどに行き、障害者にとつてどのような地域なのかを体験をとおし考えることができた。駅には車椅子の人専用のスロープができていたり、下車する駅に事前に連絡が入っていて駅員の補助があったり、住民運動の末に身障者用のエレベーターが設置されていたり。逆に車椅子ではとても届かない商品陳列棚：無造作に置かれ



いるのか：「難しい事やわからない事も沢山あるけどこれから少しずついろんな事を知っていききたい」と目を輝かせて感想を述べていた。

入学して早三ヶ月。解剖学や生理学など専門的な学びも始まった。清拭や血圧測定もマスターした(?)。感度が高く、元氣印の十一期生の学びはまだまだ始まったばかり。私達1科の教員集団も学生たちに負けないように団結して全力で応援し、共に学んでいきたい。

(1科1年担任 井上 裕紀子)

成人I実習

1科10期生は、カリキュラムの変更に伴い、成人I実習は病態と治療の関連をはじめとして、患者を総合的につかみ、患者の要求を実現するという目的で初めて病態をつかんだ上での実習、又、実践した看護を看護計画として後追いで立案する、という初めてづくしの実習を五月九日から五月二十六日迄の三週間行いました。

受け持った患者さんは、今まさに病気が少しづつ進行中の方から、ターミナル期の方と様々でしたが、どうしてこんなに患者さんを苦しめているのか、とその

た路上駐輪自転車、わずかのスロープでもものすごく力が必要な事やほんの少しの段差も転倒の危険があるという事、歩道を通つていても吸い込まれそうな大型トラックのタイヤ：車椅子の目線になつて初めて多くのことを知った。パリアフリーが叫ばれる今日、改善してきているところも沢山あるが「そんな事してもらっちゃ困るんだよね」「つたく：邪魔なんだよ」と店員やお客に吐き捨てられた言葉に本当に必要なのは心のバリアフリーではないかとクラスで学び合った。

三年生の研修旅行の発表に参加し、戦前・戦中・戦後の教育と歴史、水保病公害、ハンセン氏病の歴史など社会科の授業で何となく聞いたことはあるけれど：実際には本当にひどい事がこの日本で行われていたという事実。それも大昔のことではなく、現在もそのことで苦しんでいる多くの人がある事。平和だと思っていた日本でこんな事が起ころうとして

患者さん固有の病態に悪戦苦闘しながらも毎日真摯に向き合いました。生活史との関係も見えてきました。そして、もっと今の自分達にできる応援はないのか、と各々のグループで意見交換も行い、自分の受持患者さんだけでなく、グループメンバーの患者さんも知り、共有してというところ、病棟からの助言もいただきながら実践してきました。

退院した患者さんの訪問もさせていただき、家庭での役割や、生活がより見えてきて、老人医療費が適応になる年齢迄受診をひかえていた事実も改めて考えさせられました。

実習終了後のゼミナールでは、今年から全員の発表ではなく、グループでの代表事例になりましたが、ゼミ委員を中心に準備し、各々の患者さんから学びたい、という思いが伝わる様な討論ができたゼミでした。

出た意見は、一般的な病状や検査データを理解していないと個性性に合った観察ができないことを身にしみて感じた。日々の働きかけを学生達だけでなく、家族やチームに伝え、継続していくことが大切。患者さんの、「家に帰りたい」という思いと、病状によって、又、家族の介護力不足、日中独居になってしまいう事等々、患者さんの願いが叶えられない現状も知り、今後の老年、在宅実習、社会保障への学びへと引き続きの課題が明確になった。

実習中、受け持ったターミナル期の患者さんの死という辛い体験もしたが、精一杯、患者さんや家族の思いも受け止められた実習でした。

(1科2年担任 江島 典子)

## いのちの重さを知る旅路

in 九州

私たち1科9期生は、「いのちの重さを知る旅路」というテーマで九州へ四日間の旅をしてきました。

一日目は九州の南端、鹿児島へ行きました。知覧特攻平和会館、武家屋敷、開聞岳を見渡せる池田湖、山川町の湖南丸の碑を見学しました。知覧特攻平和会館では、特攻隊員の写真や遺書、特攻機などが展示してありました。まず、特攻隊員の中に自分たちよりも若い青年がいたことに驚き、最後に撮ったであろう写真の笑顔に胸が痛くなりました。

その写真からはこれから死んでいくでゆく恐れや不安はうかがえず、いつの時代も変らない青年らしい輝きがありました。遺書にも「怖い」とか「死にたい」などの言葉はひとつもなく、「天皇万歳」「お国のため」という言葉があり、戦時中の教育の恐ろしさを感じました。絶対主義的天皇制という制度は、教育をコントロールすることで、天皇や政府にとって有益な人間を形成していったということを学びました。

二日目は鹿児島から熊本



まで北上し、水俣協立病院でのお話を聞き、午後は福岡の柳川で川下りや白秋記念館の見学をしました。水俣では(株)チツソ・熊本県と水俣病の関係や水俣病患者の人権を獲得するための闘いなどをお話していただきました。水俣協立病院の前身である水俣診療所は、水俣病患者の往診や検診、訪問看護を行っており、訪問看護は保険点数がついていなかったころは、ボランティアで行っていたことを知り、愛と情熱を感じました。私たちには計り知れないほどのご苦労と努力をされながらも患者の人権を守り抜く医療を貫いていました。こうして闘い続けて勝ち取ってきた患者のための医療を守つていかななくてはいけないと思います。

三日目は、福岡の星野村、

諫早湾へ行きました。星野村では、広島の原爆の火を持ち帰り大切に守り続けていた山本達夫さんの息子・拓道さんのお話とその火が灯されている平和の塔の見学をしました。現在は平和の火と呼んでいますが、「父にとつては、おじさんを殺した火でもあるし、広島を焼き払った火でもある。『平和の火』というのには死ぬまで父の中では遠い言葉、複雑な火だったのでは」という拓道さんの言葉が印象的でした。確かに原爆の火を平和の火だなんて思えないと思います。ただ、その火が存在することで戦争を体験していない私たちにも戦



争って何？平和ってどういうことだろう？と考えるきっかけになります。世代は変っても、語り継いでいかななくてはならない大切なものだと思います。

有明海での諫早湾干拓事業では、国や企業の利潤追求のために環境が破壊され、そして、それによってそこに暮らしている人々が苦しんでいるという実態を知りました。利潤追求のために自然・生態系が破壊されたり、そこに暮らしている人々が苦しんでいるのは許せない、許してはいけないと思いました。

私たちは、この旅行を通して自分たちが無知だったことを情なく思うと同時に知覧の特攻隊、水俣の問題、諫早湾干拓事業などどれも非人道的で、軍国主義と利潤追求の資本主義社会の中で生み出された人権侵害に憤りを感じました。また、その一方で人権を守ろう、事実を伝えようと現在も闘っている人がいることを知りました。私達は、患者の立場に立った医療を目指し、今後もっと世の中の動きに向けていきたいと思えます。行く先々で温かく迎えていただき熱心にお話をしてくださったことに感謝します。

（1科3年生  
中村 友恵



## 看護2科1年生 (11期生)

### 合宿研修

2科11期生は、男性八名を含む四十人のクラスです。半数が一年〜二年の看護労働経験を持ち、幅広い視野で患者さんや社会を捉える力があります。

四月九日に入学式を終えた十一期生は、またクラスメートの顔も名前も覚えていない三日後に看護総論「合宿研修」が始まります。

それぞれが新しい自分と出会い、新たな学びを踏み出す一歩に私達教員も励まされる合宿研修の学びのレポートを紹介します。

学生Fさん

「この合宿に参加して色々な自分を発見することができました。出会って二週間という短い時間の中で、行うグループでの活動や、自己の役割など正直投げ出してしまいたい気持ちにもなりました。『略〜リーダー』という大役を任せられ、そのことをすぐく重荷に感じていました。みんなの名前すら覚えていないのに先頭に立って指示を出すことなど無理だと自分で決めつけてしまっていました。



でもそこで一つ気付いたんです。今までは、自分がやらなくても誰かがやってくれる環境を当たり前に作ってきたことを。それはすぐく甘えてました。結果的に今回も先生の力を借りたりグループの中で積極的な人に任せてしまったりと結局また同じ繰り返しをしてしまいました。こう言ったら嫌に思われてしまうんじゃないか、相手は自分をどう思っているのかなど、マイナス思考で心配性の性格をまざまざと感じさせられました。高校を卒業して入った製造の会社では、男性のみの職場、縦社会、会話もないという環境で三年間働きました。たまたまと仕事をこなせばいい。それしか知りませんでした。『略〜

看護という仕事を行うにあたり必ず求められるのがその人が持つ豊かな人間性であって、言葉や態度がどれだけ患者さんや周りの人に影響を与えるかという重要な責務だと強く思っています。看護とは何かと思う前に人とは何か、人間はどうあるべきかという自分なりの考えが持てるようこれからの二年間の学校生活で養っていききたいと思えます。自分の欠点がたくさん見つかった合宿研修でした。」

だめな自分・まんさらでもない自分と真摯に向き合う中から、「看護師である前に、一人の人間として自分の考えを持ちたい」という要求に応える応援を力強く実践していきたく思います。

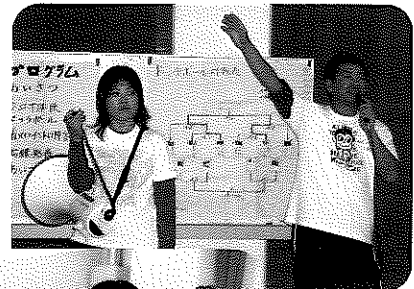
（2科1年担任 生田 知歩）

## 看護2科2年生 (10期生)

### 栗生楽泉園

私は今回栗生楽泉園に行ったことで、これまでのハンセン病についての思いが大きく変った。去年私は重監房復元についての、2年生からの署名にサインしたことがあった。しかし、その時の私はちゃんとした本当の現状を理解しないままサインしていたことに気付かされ反省した。

実際に行った栗生楽泉園には、信じられないようなハンセン病医療の歴史があった。餅（こだま）さんのお話の内容は、



とても人間から人間への対応とは思えないような悲惨なものばかりだった。一番衝撃的だったのが、医療者が患者の産んだばかりの赤ちゃんの息をすぐにとめて殺し、ホルマリンづけにして研究材料にしていたという話だった。私は「人間のする事ではない」と思った。何のためにこの赤ちゃんは産まれてきて、また何の為に母さんは苦しみながら赤ちゃんを産んだのか。このときのお母さんの気持ちはどんなだったのか。この話を聞きとても悲しくなり怒りがこみあげてきた。重監房跡地で話を聞いた時はとても胸が苦しくなった。一日二食で冬の日でも天井のないコンクリートの上で生活していた。湿気で冷たく凍る布団の中で亡くなっていった人も何人が居た。ハンセン病にかかっただけでも辛いのに、社会から切り離し、厳重に隔離され世間の人達から差別され生きてきた。

辛い過去を抱え、いまだに謝罪される事のないまま何年もの間、世間の人達から差別を受け、意見を無視されながらも負けずに訴えつづけている皆さんを本当に尊敬する。また裏切られ続けてきた、医療従事者である私たちを「これからの希望だ」と言い、ここまで一生懸命の伝えて下さったことにとても感謝した。その思いを踏みにじらない為にも、ハンセン病について正しく学んだこの知識を自分以外の人に伝えたり、これからの間違った法律や医療問題について考えたりして、一緒に闘っていきたいと思った。正しい内容を理解した上で目的意識的に他人に伝えようとすれば、こんな私でも現状を変えられるのではないかと思った。

(2科2年 池田 由佳)

## 開設十周年に あたって

二〇〇五年四月、本校は開設十周年を迎えました。  
この十年間で、六四〇名の学生が本校を卒業し、現在二〇三名の学生が元気に学んでいます。  
学生に励まされ、多くの皆様に支えられた十年間でした。  
東葛看護専門学校は、この十年の歩みを振り返り、新たな十年の第一歩とするため以下の記念行事と企画を計画しています。皆様の参加とご協力をよろしくお願い致します。

- 1 十周年記念レセプション  
日時 九月十七日(土)  
午後三時～六時  
会場 本校 体育室  
内容 卒業生・在校生・講師の皆様や地域・各界の関係者が一同に集い、十年間の歩みを振り返り交流します。
- 2 小冊子「東葛看護学の学びの十年」を発行  
学生とともに苦闘した十年間の学びを総括し、本校の教育の到達点を明らかにします。
- 3 学校紹介パンフレットの改訂  
一九九七年に作成した学校パンフ「この学校で見つけました・大切なもの」を全面改訂します。

## 学生自治会

こんにちは。第七期自治会です。去年の九月と十二月に役員選挙を行い、新たなメンバーで活動しています。

去年の十一月には、全日本自治会連合会の方に来て頂き、「自治会とは」というテーマで学習しました。自治会のあり方、活動についてなどを学び、

「自治会とは、より良い学生生活を送れるようにあるものだ」と教えてもらいました。また、分からないことも多い私達ですが、この学習会で学んだことを生かし、学生と学校の掛け橋になればいいなと思い、日々頑張っています。

二月には、授業に対するアンケートを全校で行い、普段の授業に対して学生が思っていることや「こうして欲しい」という要望など、学生の思いを学校に届けました。

また、卒業生を送る会や新入生歓迎会では、たくさんの方の意見を取り入れ、みんなが楽しく交流できるようにしました。みなさんの笑顔を多く見られ、良かったです。



自治会員一同

最近では、精神障害者の障害者自立支援法に反対する署名活動に自治会として参加し、全校のみなさんに協力して頂きました。これからは医療に携わる者として、起きている問題を知り、行動していきたいと思えます。  
去年の一年間の活動で様々な課題も残りましたが、今後も、みなさんの学校生活がより良いものとなるように活動していきますので、どうぞ自治会に声を掛けて下さい。よろしくお願ひします。

# よろしく ごろうさま

## 新任・退任 教員紹介



この一月から異動してきました、山口人美と申します。生れも育ちもずっと千葉県です。

私は、木更津市にある君津中央病院附属看護学校を卒業後、船橋市にある船橋二和病院に就職しました。船橋二和病院では、初めの一年間は循環器チームへ。その後呼吸器内科チームで約九年間を過ごしました。

趣味は、ダイビングです。ここ数年は、沖縄で潜っています。沖縄は、世界でも有名なサンゴの生息地です。六月は、サンゴの産卵がみられる時期です。私はまだ、産卵シーンを見ることがありませんが、一度はあの神秘的な世界を体験したいと思っています。

(専任教員 山口 人美)



はじめまして。  
四月一日付で東葛病院より移動してまいりました江藤です。学校を卒業して十年程、ずっと臨床

で助産師として働いてきました。久しぶりの学校という世界はとてもまぶしくて、活気に満ちていて学生達に前向きなパワーをもらっています。

学校にきて感じたことは「いかに自分がわかったつもりになっていたか」ということでした。「わからないこと」「わかったつもりになっていたこと」は学生と共に学んでいけばいいことを先輩教員に教えていただきました。目下の悩みはいろいろな意味で時間が足りないことです。今のところ平日は家事や育児のほとんどを夫にまかせて、学校生活にどっぷりつかっている毎日です。

(専任教員 江藤 ちひろ)



皆さん、こんにちは!!  
二〇〇五年四月より東葛看護専門学校に着任致しています。

私は看護学校卒業後長い間看護師として民医連で働いていましたが、退職と同時に教員を目指しました。その後で五年間学校に勤務していましたが、年々机上の空論ではなく生活背景をも据えた看護を実践したいという思いが強くなり民医連に戻る決意をしました。臨床も大好きですが、今はもう少し物事を学習し、人々に密着することで人間に対する共感を学生とともに育んで行きたいと考えています。そして二十一世紀を担う医療を仲間とともに創りあげられたら。どうぞよろしくお願ひ致します。

(専任教員 高田 澄子)



今年も一昨年に引き続き、学校の人事がおおきく変わりました。三名を教員養成講習の受講に派遣し、二名の新人を



副校長の退任に伴い、石倉前1科教務主任が副校長に、1科教務主任には前2科教務主任の徳丸先生がそれぞれ着任しました。

創立十周年記念企画、学生の情報管理のシステム化、来年予定されるカリキュラム改定など課題は尽きませんが、新体制で頑張りたいと思います。よろしくお願ひ致します。

## 編集後記

七月一日、本校の一人の学生の卒業式がとりおこなわれました。教職員十七名、仕事の合間に駆けつけた同級生七名、お母さんとポニーフレンドの参列でささやかに。

ご本人の決意表明の抜粋を紹介致します。

「自分が両脇をガツチリ支えられて卒業できるという事実―これは自分にとって奇跡みたい。できそうもないことを可能に変えられるミラクルな東葛看護学校の先生たちのチームの柔軟性。この学校で得たものは私にとっては破天荒的なこと―この事実から感謝し、生きていく中でさらに学び、まわりに返していきたい。卒業してから、私にはいつでも帰れる場所がある。それは私の原点でもあるこの学校。支えてくれたみんなに言葉では伝えきれないくらいのおおきくありがとうをつたえたい。」

励まされたのは私たちでした。ありがとう。

卒業生がいつまでも安心して帰れる学校づくりを、今後とも頑張ります。

なのはな通信編集委員  
石倉啓子、伊波すみ子、徳丸美津子